

20049

心拍再開まで時間を要したが、独歩にて退院した急性冠症候群(ACS)への看護介入

【背景】心停止により脳への酸素供給が途絶えると意識は数秒以内に消失し 3-5 分以上の心停止では仮に自己心拍が再開しても脳障害(蘇生後脳症)を生じる場合もある。今回我々は自己心拍再開(ROSC)までに時間を要したものの神経学的後遺症なく社会復帰に至った症例を経験したので、ここに報告する。【経過】60 代男性、自宅で入浴後に胸痛が出現し救急要請、救急隊現着時は心停止(初期波形:心室細動)であり直ちに CPR が開始された。当院搬送後 ROSC が得られたが、発症から 1 時間 20 分が経過していた。ROSC 後の心電図所見から ACS が疑われたため緊急 CAG を施行、RCA #2 が責任病変であり Primary PCI を行った。術後 GCS3 点であった為、低体温療法を試行した。その後意識レベルの改善は乏しかった。そこで本人の好きな曲を流し、家族との面会時間を増やした。その後徐々に意識レベルが改善したが、気管切開が行われていた為、自分の意志を伝えることができなかった。そのため、スピーチカニューレに変更し、言語的コミュニケーションを図れるように介入した。それをきっかけにして表情が明るくなり、意欲的になった。第 113 病日、独歩にて退院となった。【考察】今回我々は、患者の意識がない状態でも音楽を聴かせ、家族と過ごす時間を増やし不安・恐怖・孤独の軽減を計った。それが意識レベルの改善に多少なりとも寄与したと考えられる。永田は「音楽はリズムが自律神経中枢を調節する」と述べている。今後も積極的に音楽を取り入れた看護ケアを実践していきたい。